

配置薬に使用される生薬の特徴①

村上 守一

エンゴサク（延胡索） *Corydalis turtschaninovii* Bess. f. *yunhusyo* Y.H.Chou et
C.C.Hsu（ケシ科 *Papaveraceae*）

漢方処方用薬のひとつですが、本草書に現れるのは唐代の『本草拾遺』(739)
や『海薬本草』(700年代)に、薬として掲載されたのは北宋の『開宝本草』(975)
に延胡索の名で初めて収載された比較的新しい薬用植物です。語源は南宋の『湯

液本草』(1248)に「本来の名前は玄胡索であったが宋の真宋の諱（いみな）が玄
であったことからこの名を避けて延に書き改めた。」とあります。しかし真宋の在
位は997-1022年で『開宝本草』より遅く、これをもって語源とするには疑わし
く、また明代の『本草原始』(1612)に「玄は塊茎の皮の色が黒い（玄＝黒）から、
胡は胡国に生ずるから、索はその苗に紐のようなものが交わるから」と述べてい
ますが前述の『本草拾遺』には延胡索は奚国（中国東北地方）に産し、安東（平
壤付近）を経て中国へ来た」と記しており、中央アジアの胡国産であることから
名づけられたということも怪しく思えます。

現在使われている生薬は局方では中国の浙江、湖北、湖南省で生産される延胡
索一種に限られていますが、過去には色々な種類が用いられたようです。享保
(1716)年間には中国から2種類の苗が導入された記録がありますが、現在は栽培
されておらず、種も明らかではありません。国内に自生し、代用として使われた
種にはジロボウエンゴサク、エゾエンゴサク、ヤマエンゴサク等がありますが、
現在は生産されていません。

植物の特徴

ケシ科のキケマン属には地下に塊茎を持つ植物と、持たない植物があります。
前者が薬に用いられている種です。過去には色々な植物が用いられましたがこ
では局方エンゴサクについて説明します。

草丈10～20 cmの小型の多年草で、雪解け後に茎葉を展開し、4月初めには紅紫
色の花を咲かせ、5～6月には地上部は枯れます。塊茎は扁球状で径0.5～2.5

cmと比較的大きく、内部は黄色をしています。



エンゴサク



ヤマエンゴサク

生 薬

茎葉が枯れた 5～6 月に掘取り、薄皮を取り除いて水洗し、沸騰した湯の中で芯まで黄色を帯びるまで煮た後、天日で乾燥します。大きく、質が堅く、中身まで黄色で光沢があるものが良品。



延胡索(生薬)

成 分

アルカロイドのコリダリン、プロトピン、テトラヒドロパルマチン、デハイドロコリダリン、テトラヒドロコルンバミン等を含有しています。

薬効および使用法

浄血、鎮痛、鎮痙薬として、頭痛、胸やけ、胃痛、腹痛、月経通に用いる外、安中散、牛膝散、折衝飲等漢方処方に配合されます。